

## 11 高浜虚子と交流、西三河俳壇の巨匠

### 永井 寶水<sup>ひんすい</sup> (1880～1959／棚尾)



#### 1 生い立ちと兄の影響

永井寶水は、名を四三郎と言ひ、明治13年(1880)9月、碧海郡大浜村材木屋磯貝平七の四男として生まれた。

長兄の国太郎は、24歳で棚尾小学校の校長となり、「碧潭」と号し漢詩をよくした文人で、この兄に啓発されたことが、後の俳誌「アヲミ」の刊行や碧海吟社の主幹としての文芸活動の芽生えとなった。

#### 2 漢詩と和歌を学び、俳句を志す

四三郎は15歳で大浜小学校の教師となり、明治35年(1902)、「大浜同志の会」の結成に参加し、編集に携わった。碧潭の指導を受け「小碧」と号して漢詩を、また、熱田神宮祢宜栗田広治より和歌を学び、「久成」と号した。

明治37年(1904)、棚尾村永井嘉四郎の娘きくの婿養子に入った。明治40年(1907)、「三楽」と号し俳句の道を志して岡崎の植田石芝に学び、後東京の岡野知十の「十風舎」に入った。大正2年(1913)には、俳句界の重鎮高浜虚子に師事した。

#### 3 俳誌「アヲミ」を創刊

大正3年(1914)、寶水1人の手で毛筆手書きや複写紙による回覧紙「アヲミ」を発行した。会員は北海道から鹿児島まで全国にわたり70余名を数えた。東北、中部、西部の三巻に分冊して回覧された。本格的な俳誌「アヲミ」の前身である。

そして謄写版刷り袋綴B5版の「アヲミ」第1号が大正10年(1921)7月1日に「碧海吟社」の主幹として寶水の手で発刊された。巻頭言で、「私等が濤荒ぶる『碧海』の一角に立って大景の一点となった時…『アヲミ』はその涙の跡です…」と寶水は言った。大正11年(1922)10月の第9号より活版刷になった。花簑らが有力な句友として、また、杉浦冷石(明治29年、西端生まれ。新川小学校の教員から新聞記者となり、文芸欄を担当し、俳句への造詣を深め、自ら俳誌「野火」や「白魚火」を創刊した)らに編集の助言を受けた。

#### 4 全国に三河俳壇あり、高浜虚子との交流

大正11年(1922)12月20日、高浜虚子が棚尾へ来て光輪寺で句会が開かれた。そのとき虚子に揮毫を願い、それをアヲミ表紙の題字にした。また、藤井達吉が表紙絵を描き、アヲミの金看板となった。

以後、虚子を頂点として中央俳壇と太いパイプで直結した。秋桜子ら著名俳人がアヲミを訪れた。虚子は昭和3年(1928)9月29日、たけし、花簑に誘われ藤井達吉と共に棚尾への二度目の訪問をした。衣ヶ浦に十六夜の無月の舟を出し、寶水宅を訪れた。

このように碧海吟社のアヲミが、全国に三河俳壇ありとの名声を得たのは、地域文化の拠点として郷土の薫りをもった俳誌であったからである。この頃、寶水は40歳の不惑を越えあぶらの乗り切ったときであり、アヲミの名声と共に創作活動の最

盛期を迎えた。

## 5 辛苦の時期、藤井達吉の励ましと妻らの献身

大正末期は、賓水辛苦の時代であった。養家は義兄の借財の請け判で家屋敷を失い、実家も破産、5人の子どもを抱え進退窮まり、俳句活動も大きな壁に当たった。その後大正14年(1925)、棚尾南端に家を求め、「対矧塘居」と名づけた。ここが最盛期から晩年までの作句活動の場となり、終の棲家となった。

この間、藤井達吉はアヲミ紙上で、「今行き詰まった句作編集を開く鍵は、勇気だけである。捨て身だ、野人だ…」と励ました。ここで忘れてはならないのは、教師・保母として家計を助けた妻きくの献身と、アヲミの発行を手伝った子ども等の協力であった。

## 6 昭和17年まで続いた清浄無垢な俳誌「アヲミ」

昭和5年(1930)、長女の教師就職と同時に賓水は学校を退職した。昭和7年(1932)に句友でもあった長男正生(号は真小男・まさお)を肺疾患で失った。この年アヲミは、120号で休刊した。

賓水は昭和8年(1933)、53歳のとき大浜三鱗(株)に就職した。そして、昭和12年(1937)3月、アヲミを復活させた。しかし、その5年後の昭和17年(1942)、過労から脳溢血で倒れた。戦局が急を告げ、俳句誌統合により、その年11月、通巻189号をもって潔く廃刊とした。最盛期には国内外から500人余の投句があり、同人には、蔦堂、二九、荷芳、光裕、野潮、秋花、杜童、冷石、虹夢らがいた。

アヲミの同人で現在百歳を越えて活躍している秋花(岡島良平)が終刊号に一文を寄せ、「アヲミほど、清浄無垢な俳誌はない」と評している。

## 7 晩年の足跡、新川小学校には校歌額が

2度の地震と終戦の後も病に耐えながら賓水の俳句への情熱は続いた。昭和24年(1949)には、伝統あるホトトギス派の同人に推挙された。

この年、虚子撰のうち70句が古希記念誌として出された。翌年、碧南棚尾八柱神社境内に「初明かり吉良の横山、眉の如」の碑が立った。

また、昭和31年(1956)賓水句集が句友冷石らの尽力で出版された。現在も新川小学校体育館正面左には、賓水作詞の校歌額が掲げられている。

昭和34年(1959)11月15日、眠るが如くに往生した。享年79歳であった。昭和32年(1957)の初秋の「法師蟬、唐臼に鳴くと妻の言う」が最後の句となった。そして、永井家の一室には、今でも虚子、賓水ら36人の句をおさめた三十六句の句屏風が置かれてあり、質の高い文化の薫りと風情を漂わせている。

### ◆もっと知りたいなら

- ・『賓水の文芸活動の奇蹟』(永井千秋)
  - ・『永井賓水』(平20季刊誌『みどり』)
- 石川繁治)